日本人考古学者に仮装

関雄二（せき ゆうじ）　民博 人類文明誌研究部

南米ペルーの山岳地帯では、乾季にあたる六月から一〇月にかけて祭りが集中する。一六世紀半ばのスペインによる征服以降、強制されながらも、浸透していったカトリックの守護聖人を戴く祭りが多い。とはいえ、酒や食べ物、音楽や踊りに興じる人びとの姿は、キリスト教とはいえないアンデス的なものを感じさせる。村内を巡回する聖人像の行列にも、風変わりな人びとが加わることが多い。頭に鳥の羽根飾りを、足首にはガラガラを巻き付け、手に鞭（むち）をもって飛び跳ねる。どう見ても異邦人である。アンデス山脈の東側に広がるアマゾン地帯からの来訪者で、北高地ではチュンチョスとよばれる。日本の村祭りでも外来の来訪神が人びとを言祝（ことほ）ぐといわれるが、それに似ている。

わたしたちの発掘調査

わたしたちがここ十年以上も発掘をおこなってきたペルー北部高地バコパンパ遺跡の麓に、調査期間中滞在する同名の村がある。村祭りではチュンチョスこそ登場しないが、外来者が重要な役割を果たす。遺跡は紀元前一二〇〇年ごろから紀元前五〇〇年ごろにあたる大神殿で、東京ドームひとつ分くらいの大きさを誇る。二〇〇九年に、金製の耳飾りを副葬した女性指導者の墓を発見し、「バコパンパの貴婦人の墓」と名付けた。その後も、

ヨンシー踊（2003年10月）

琉球人踊と歴史

これら三カ所以外の踊も含めて、各地の踊はいずれも沖縄や沖縄の人びととのかかわりを由来として伝えているものの、実際の沖縄の踊との類似はほとんど感じられない。また、奇矯で滑稽な動作の演技、仮面や衣装や化粧による異相・異形の扮装、踊り手が意味を解さない調章が混じるかけ声や歌詞といった、沖縄の人びとが自分たちとはさまざまな面で異質であることを強調するかのような演出が施されていることも共通する。

それに加えて、こうした踊が熊本県と宮崎県中部以北、奄美大島以南の奄美群島では見られず、旧薩摩藩領に分布が限られることを併せて考えると、これらの踊の伝来が、薩摩藩が慶長一四（一六〇九）年の琉球侵攻によって琉球支配を確立し、琉球から鹿児島に進貢船や使節が頻繁にやって来るようになったという、この地域が経てきた歴史と無関係ではないことを予想させる。更に、奄美大島以南の各地の芸能に、丸に十の字の島津氏の紋をつけたそれほど奇矯でも滑稽でもない武士や役人がしばしば登場することも視野に収めると、この地域の薩摩藩と琉球の支配・被支配の歴史のなかで、双方の人びとが相手側の人びとに対して抱いた必ずしも対等とはいえない認識が、それぞれの芸能に刻印されているようにも思えてくるが、うがち過ぎであろうか。

「パコパンパの貴婦人」を担ぐ高校生たち（2015年）

ジャガーを象（かたど）った石彫や、金製首飾りの墓などが毎年のように出土し、今では考古学関係者ばかりでなく、一般にもその名は知られるようになった。

わたしたちは遺跡見学会や出土遺物の展覧会などをとおして、村人に調査・研究内容を説明し、また作業員の選出や給与についても村会議に託すなど、村との共同作業を心がけてきた。このことが功を奏してか、五年ほど前に遺跡保護団体が自主的に結成されている。

仮装行列に登場する〝わたし〟

そんな村人の意識は、村祭りにもあらわれ始めた。祭りを仕切る委員会の発案で、二年前から仮装行列が祭りの出し物に加わったのである。幼稚園児や小中学生が、さまざまな人物に仮装する。村の守護聖人である聖女サンタ・ロサやイエス・キリストが登場するのは普通だとしても、「文化遺産の村バコパンパ」と書かれたプラカードをもつ母親の後から、遺跡で発見された「パコパンパの貴婦人」姿をした女児が登場したのには驚いた。

それだけではない。パナマ帽をかぶり、手に杖（つえ）をもった、かわいらしい男児の肩にかけられた襷（たすき）には〝YUQUI ZEKI（ユキ セキ）〟の文字が見えるではないか。綴（つづ）りの間違いはともかく、調査中のわたしの姿にはちがいない。しかも調査に加わる日本の女性考古学者の仮装も続く。小中学生の行列はもっと豪華であった。採集狩猟民から始まり、「パコパンパの貴婦人」、インカ王、植民地時代を象徴するイエス・キリストや聖人、村にはじめて布教に来た宣教師、そして再び〝わたし〟が登場したのである。

わたしたちの存在や調査の成果は、人びとの歴史意識のなかに位置づけられ、アイデンティティのよりどころとなりつつあるようだ。文化遺産の保護や活用にばかり気をとられていたせいか、地元の人びとが自らの手で、歴史や文化遺産への関心を高めていたことに自分でも気づいていなかった。仮装されるのも悪くないものだ。

「関雄二先生」と書かれた襷をかける幼稚園児（2015年）